

要 旨

A Study on the Acquisition Order of
Nine Grammatical Morphemes and Error Analysis

加藤 滯

本研究では、グローバル化が謳われ、英語を共通語 (English as a Global Lingua Franca: EGLF) とする現代の日本において、中学生がどのように英語の文法項目を習得しているかを明らかにすること目的とし、特に、文法形態素の習得順序とそれに伴う誤答を分析した。この論文の研究課題は以下の3つである。(1) 日本人中学生にとって、文法を学習する際にどの文法形態素の習得が容易・困難か。(2) 本研究と先行研究の習得順序に差異はあるか。(3) 日本において文法形態素を習得する際に影響を及ぼす要因は何か。

日本において英語を学習する中学校3年生41名を対象に、文法性判断テストを行った。誤った文章を正確に修正することで、習得していると判断した。Tomita (1989) の数式を用いて習得率を割り出すことによって、習得順序を3つのグループに分けられた。また、誤った修正がなされた文章を分析し、誤りの要因を1: 第1言語からの転移、2: 過剰一般化、3: 第2言語の文法構造、4: 語彙の4つに分類し、さらに3と4をそれぞれ細分化し、6つに分けた (3a: 副詞句、3b: チャンク、4a: スペリング、4b: 意味)。

分析の結果、以下のことが明らかとなった。(1) 連結詞、不規則変化動詞、現在進行形が最も容易なグループであり、複数形、冠詞、所有格が最も困難なグループである。(2) スピアマンの相関係数より、所有格の習得順序は過去の研究結果より低く、不規則変化動詞の習得順序は高い。(3) 誤りは第1言語からの転移や過剰一般化だけでなく、言語間の文法構造の違いや語彙によっても引き起こされる。(1) と(2) に関しては、日本語の所有格と同形であり、正の転移が見られると考えられていた。しかし、過去の研究では日本語で前提知識を持つものを英語に修正する手段が用いられており、本研究とはデータの収集方法が異なっている。これを理由に、所有

格の習得順序が大きく異なったのだと考えられる。

以上の結果から、この30年間の学校教育の変遷とともに、習得順序も変化していることが明らかとなった。